

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

http://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/index.jsp TEL:0798-54-6019

第三十五回RCCフォーラム講演抄(二〇〇七年五月一日)

思考停止をやめる！ 紛争転換と非暴力で 平和を創ろう！

大阪学院大学准教授
トランセンド研究会事務局長
非暴力平和隊・日本理事



奥本京子

◆はじめに

私は、平和学と芸術(特に文学や演劇)とのあいだを橋渡しするものとして、「紛争転換」をとらえています。同時に、いわゆる「平和の専門家」というものはいなくていい、という気持ちも強く持っています。平和のような大きな問題を考えるとき、「専門家」に任せていていいはずはなく、社会全体で取り組んでいくべきだと考えるからです。今日は、紛争転換のネットワークである「トランセンド(平和的手段による紛争の転換)」と、非暴力のネットワークである「非暴力平和隊」の活動を紹介しつつ、一緒に考えていきたいと思えます。

◆社会に蔓延する暴力の正当化と、疑問

私たちの今の社会においては、暴力要素を正当化するために、よく聞かれる政治的な議論があります。「いざというときのため

に、有事にそなえるのだ」、「もし、日本が攻められたらどうするのか」と。しかし、本当にそのなかでしょうか。まず、平和的手段によって問題を予防し、解決する方法を模索するべきではないでしょうか。戦争の準備をしてはいけなと思います。

「じゃあ、「敵」に暴力を課されたらどうするのよ!」という人がいるかもしれません。しかし、まず、第一に、考えるべきは、誰が「敵」を想定し、誰がそのイメージを煽っているかということ。情報操作したり、政府が「国益」の名の下に進めたり、利益を得たりする人たちの言説に踊らされてはいけません。

第二に、暴力にいったん依存してしまつと、暴力に対して麻痺してしまうということがあると思います。今、元イスラエル兵の若者5人のグループが、イスラエル軍を告発しています。昔、ホロコーストを体験したユダヤ人が、現在、占領下のパレ

スチナに対して同じことをやるうとしていたということを、イスラエル側から告発しています。軍では、銃で民間人を撃つことを禁止しています。しかし、実際に一兵士として暴力下にいる人間は、実際に自分でも気づかないうちに墮落していくのです。

「撃つわけではない」と言い聞かせながら、昨日は銃の照準を合わせてみる。そして、今日は、同じように銃を構えても、人に銃を向けることに違和感を持たない。さらに、明日は照準を合わせ、心の中で何かが変わり始める。徐々に、実際に発砲してしまうことに繋がっていく...

このことが、私たち自身の状況と重なっているように思えます。日本が向かおうとしている状況と、そして、かつてあった状況と、全くシンクロしているのではないのでしょうか。私は、日本の社会は、「平和ボケ」ならぬ「暴力ボケ」状態だと思えます。暴力に対して麻痺してい

るということです。ちよこつとだけ暴力を許すことで、つまり、例えば、「弱者」とされる人たちにしわ寄せがいくことを「しょうがない」とし、だんだんにその暴力を感じなくなるのです。

◆気分転換のエクササイズ、そして「思考停止」しないということ

気分転換に、「にぎりこぶしのエクササイズ(練習問題)」をやってみましょう。隣同士、二人一組でチームを作ってください。Aさんは、握りこぶしを作ってください。Bさんは、その握りこぶしを開けてください。

開けることに成功した人は、どのように開けましたか。Aさんのこぶしに飛びついたBさんはいいますか。言葉で「開けてくださる?」と聞いたBさんほどのくらいいるでしょうか。瞬間的に、よく考えて、行動するということとは難しいですね。「思考停止」せずに、常に疑問をもちつつ考えていることは大事です。無批判にならず、色々なことに流されずに、時々、ゆっくり立ち止まって、踏ん張って考えることができるでしょうか。「みんなと一緒に大丈夫」というのは幻想であって、気がついたら、皆で一緒に暴力状態にとっぷりつかっていた...なんて、後悔しても遅いのです。

◆ 続けて、暴力への疑問

第三に、柔軟に様々な角度から考えるようになりたいですね。例えば、憲法問題があります。改憲側も、護憲側・平和運動側も二元論に捉われていないでしょうか。まず、「改憲ありき」、「護憲ありき」で、思考停止状態に陥っています。今の日本の社会は、全体が差別構造になっていると思います。悪気はなかったけど、イジメを黙認してしまっている、そして、徐々に麻痺して意識できなくなっていくのです。考え、行動するということを、繰り返しトレーニングする必要があるのではないかと思います。「平和」を叫ぶだけというのは、そういう意味において、とても危険です。考えて、行動して、そして、結果としての平和ならいいのですが、どうしても、どこかで思考が止まってしまい、シュプレヒコールをあげる、というところで仲間と一緒に安心するというパターンができていないでしょうか。もちろん、今は、ごり押しの力の論理で、改憲側が圧倒的な政治的・経済的「力」を持っていますから、それに対して、力一杯抗することは大事です。でも、中間の視点、あるいは超越的な視点が必要なのではないでしょうか。



きるのです。紛争を暴力化することから、平和化する方向に変えるのです。もし、「敵が攻めてきたら」というような思考回路しかないなら、それは貧弱な発想といわざるを得ないと思います。暴力に曝される可能性についての議論は大事です。でも、「じゃあ、手遅れにならないように、戦争に関わるころまで持っていけないように、どんな代替案があるか、考えよう!」という発想も必要です。暴力が発生するのを未然に防ぎ、紛争を平和に転換する方法をお伝えします。

◆ 紛争を転換する

紛争転換という分野があります。「トランセンド」というネットワークの紹介からはじめましょう。紛争を武装させないために、例えば、トランセンドのディレクターである、ヨハン・ガルトウング博士の活動とし

て、「デンマーク政府」と「イスラム」の間におこった紛争の調停について紹介しましょう。昨年初頭に、「デンマークの新聞に、ムハンマドを揶揄する漫画が掲載された」という政治漫画の問題がありました。そこで、調停者二人（ガルトウング氏と、オクスフォード大学のタリク・ラマダン博士）が依頼を受け、当事者としては、デンマーク高官代表三人と、イスラム圏から三人の対話が始まりました。イスラム代表の返答のポイントは次のようでした。「本当の問題は漫画そのものについてではない。今回、この問題に関して、デンマーク政府に対話を申し込んだが、三回とも拒否された。デンマーク政府は、表現の自由であるというが、この事件の二年前に、キリストを揶揄した漫画を発表する」という事件があった時、デンマークは出版させなかった。今回の問題は、世界のマスコミが宣伝したように、漫画云々の問題だけではなく、対話を拒否したというデンマーク政府の姿勢、そして、対キリスト教徒と対イスラム教徒との扱いが違うということである。」

ての共同作業について考え、未来のポジティブなイメージを作り出すこと。具体的方法としては、若者同士の対話、政治家間の対話、宗教者間の対話を進めること、そして、国連の協力を得て進めている、スペイン首相とトルコ首相との文化間での対話プロジェクトへの積極的参加を提案しました。もう一つの提案は、「デンマークが中心となって、国際会議を開くこと。表現の自由とは何か、表現の自由を守りながら、相手を傷つけない方法はなにかについて考える機会を作ること。これを受けて、デンマーク政府は、具体的提案のように対話を実行するということを公表し、スペインとトルコ間のプロジェクトのために国連に多額の送金をしました。ただ、デンマークは、謝罪をしませんでした。しかし、将来の首相がやるかもしれないという可能性が残っています。それに、他の提案に従ったという点から、間接的には間違いを認めたといえます。紛争転換の仕事は、このように、問題を顕在化させ、平和の方向に少しずつ転換していくということなのです。

◆ 非暴力行動の試み

意識しないうちに「悪気なく」、暴力に依存してしまう傾向を、別の方向へ転換してみるために、もう一つの例として非暴力平和隊というネットワークを

紹介します。非暴力平和隊のフィールド・ワーカーは、約二ヶ月間の訓練後に紛争地域に派遣され、世界各地で起きている紛争の非暴力直接介入による解決をめざしています。そのためには、護衛の同行（暗殺・誘拐等の危険な立場におかれている活動家等と同行）、国際的プレゼンス（フィールド・ワーカーは紛争地帯にある村落や境界線、非武装地帯に「世界の目」として滞在し、武力行使は国際的な非難の的となるというメッセージを戦闘者に送る）、情報発信（暴力的行為が政治的に受け入れられないような環境をつくることによつて暴力を抑制）、「割り込み」対峙しているグループの間に物理的に割って入り、暴力の抑止に努め、当事者が平和的に紛争を解決するような環境をつくる）などの手法を用います。

これまで世界中の平和活動家たちが小規模な非暴力的介入について経験を積み、成功を収めて来ました。非暴力平和隊はこれを大規模に発展させるために、二〇〇二年にインドで正式に発足しました。非暴力・非武装による紛争解決が「理想主義」ではなく、「現実的」であることを示せると自負しています。地元非暴力運動体・平和組織と協力し、紛争地に国際的なチームを派遣することによって、地元活動家等に対する脅迫、妨害等を軽減させ、地域紛争が非暴力

的に地元の人によって解決できるよう、環境づくりをすることを目的としています。フィールド・ワーカーの最初の派遣地としてスリランカを選び、二〇〇三年十一月から日本人一人を含む十一人のメンバーが活動を開始しました。今も、スリランカをはじめとし、フィリピン・インドナオなどで活動を続けています。

◆身近なところからトレーニングし、社会を徐々に変えていく

こういった地道な紛争転換や平和構築の方法を、もっと広く深く社会に浸透させて、暴力を予防するばかりでなく、平和を創っていく世界を築くことが大事ではないでしょうか。私たちの身近なところから、そういった文化を築き、構造に反映させ、具体的な平和の数々を日常(家庭、職場、学校)の中で、つくっていきましよう。さまざまな「場」における「対話」、一人一人が市民ジャーナリストになる、など、方法はいくつでもあります。もちろん、上記のようなネットワークの一員となつて支えていくことも重要です。「攻められたら」という議論からはじめるのではなく、どうやって暴力を予防できるか、紛争転換して平和を創っていきけるかを考えたいものです。

第三十六回RCCフォーラム講演抄(二〇〇七年十月三日)

上海から 平和を考える

文学部 教授 大橋 毅彦



◆はじめに
遠くて近い、あるいは近くて遠い上海の街、アジア太平洋戦争の時代をこの街で過ごし、さらにその後においてはそれぞれドイツのダツハウ強制収容所や長崎に投下された原爆とも深い関わりを持った二人の芸術家を取り上げ、彼らの作品に刻まれた戦争の爪痕と、彼らが芸術の創造を通じて戦争の暴力と対峙していく軌跡について考えたい。

* * *
まずは亡命ユダヤ人版画家ダヴィッド・ルードヴィヒ・ブロッホ(David Ludwig Bloch)の場合。一九一〇年にドイツのプロッスに生まれ、幼くして聴力を失い、聾啞のハンディを背負いながらも絵付け技術や木版画技術を習得したブロッホ青年が、あの「帝国水晶の夜」事件に遭遇、保護検束の名の下にダツハウ強制収容所に送り込まれた後、かろうじてドイツ脱出に成功して上海に到着したのは一九四〇年のことだった。折しもこの上海という都市は、彼と似たような境遇を経てヨーロッパを脱出してき

た約二万人のユダヤ人にとつての避難所になるとともに、第二次上海事変以降中国大陸への侵攻を加速させていた日本の統治下に置かれる事態にも見舞われていた。そのような都市の住人となつて二年後の一九四二年二月、ブロッホは当時汪兆銘「南京」国民政府宣伝部顧問として南京と上海との間を行き来していた詩人の草野心平と共著の形で詩画集『黄包車』を刊行した。

当時、この街では主要な交通手段であつた人力車と、それを引く車夫の生活に取材した六十点の木版画をそこに一挙に掲載したことは、上海文化界の一角にユダヤ人版画家ブロッホの名を記すこととなつたが、そのようにして彼の作品が上海の数多くの新聞、雑誌メディアで注目されていった一因として、『黄包車』掲載の版画の一つ一つに、詩人草野がユニークなキャプションを添えていたことが考えられる。たとえば、インド人の交通巡査の制止を振り切つて五人の車夫が黄包車を引きながらいつせいに逃げ出すさまを捉えた画に対しては、「ふん、ひげやたあばんが/こわいんぢやないよ」というユーモアあふれる言葉が当てられる、というように。この意味においてだけならば、血腥い戦時下上海における国柄を越えた芸術家同士の画文交響はたしかに成り立っている。

しかし、同じ書物の終り近くに出てくる、春風駘蕩たる雰囲気や漂わせて数台の人力車が出遊する場面を捉えた画の横に置かれた「崑崙與富士象徴我民族的力量」という言葉は、それは全く異質な働きをしている。というのも、五線紙や音符とともに記されたこの言葉は、じつは草野が作ったものではなく、日本の傀儡と化した汪兆銘政権の発意によつて英米徹底撃滅週間なる示威運動が上海で繰り広げられた時に募集された、「大東亜民族団結行進曲」の一等入選曲の歌詞の一節だからなのである。いわば、ブロッホの版画は彼の与り知らないところで、草野心平という政治的拡声器を経て、日本の中国に対する文化統治の具へとすりかえられたのだ。そして、日本語を解し得なかつた彼が、自分の作品の一部がそのように捻じ曲げられた事実を知つたのは、その死の一年前の二〇〇一年だったのである。

ブロッホの上海滞在は九年間に及んだが、その初期において彼はかつてのダツハウ収容所における苛酷な体験の作品化にも着手している。タイトルは「ダツハウ強制収容所 一九三八年一月」、収容所の広場に多くの収監者が並ばされているさまがアクリルを用いて鳥瞰的に描かれている。背景は青黒く塗られ、無気味な静寂が画面一杯に広がっているのだが、この画ができたのは一九三七年、つまり作品の完成に三六年もの歳月がかつたことは重要な。その理由はさまざまある。だが、一九七六年のドイツ再訪を契機として「ホロコースト・シリーズ」と呼ばれる作品群を彼が一気に製作していった事実を逆証左として持ち出すなら、それは自分が助かつた喜びと、他人を押しつけて自分が生きてしまつていくことの負い目とのはざまに立たされ、心が引き裂かれる状態に、かくも長い間ブロッホが置かれていたことを物語りはしないか。

徐京植、飯島洋一、フリーモ・レーヴィイらの見解を参照しつつ、作品の内容が喚起してくる戦争の暴力についても言及しておく。まずは収監者を取り巻く監視塔から彼らの上に浴びせられる人工の光。ガス・トラックに乗せられたユダヤ人を静かに死なせるために点された詐術的な電灯

と同じく、この照明もそれによって照らし出された者に直ちに死の宣告が与えられていくような、悪意に満ちた光であるといえよう。

また、画面手前の列の中には、人間の姿ではなく、折りたたまれた彼らの衣服が置かれている場所がある。この衣服を身につけていた者の行方は？「シリーズ」中の一作である「私の家族の歴史」が描いてみせた、林の中に打ち捨てられた乳母車や家族の集合写真といったモノと同じく、この抜け殻としての衣服は、不在の表象 となつて私たちに強い感銘を与えてくる。さらにこの画が横長の板の上に描かれていること。そのキャンパスの形は、それまで身近であったものがあつた日突然、移動する監獄へと化した列車の形を想起させないか。ちなみに「シリーズ」中の一作「移送中の手」では、累々と積み重ねた人骨が透視される一台の車両も含めて暗い夜の雪原を走るドイツ帝国鉄道の列車が題材に選ばれているけれども、そのキャンパスの縦横の比率も、列車のそれと相同的な関係をとっているように思われるのである。

* * *

一九三〇年に長崎に生まれ、学徒動員先の工場で被爆した小説家の林京子も、原子爆弾の閃光を浴び、その体験を小説「祭りの場」としてまとめたのが一九七五年であったことを思えば、先に述べた悪意を持つ光や、自分を襲った戦争の暴力と向き合



うのに人間が長い時間をかけていくという事実と深く関わってきた人物だが、少女時代の彼女が父の仕事の関係で過ごした上海体験に取材した作品からも、このフォーラムに関わる問題系を引き出すことができる。まずは、その点について考えよう。

被爆体験に取材した短編からなる連作集『ギヤマン ビードロ』の中に、一つだけ原爆とは直接つながらない「黄砂」という短編がある。第二次上海事変直前の上海を舞台として、少女の「私」と日本人娼婦「お清さん」との交流が語られた作品である。町内に住む日本人の大人たちから国辱者だと蔑まれながらも、少女の「私」にはそうとは言い切れないおらかな印象を与えていた「お清さん」が、「私」を彼女の家に誘っておきながらその直後に自殺してしまう。真相はわからない。しかし「約束をした時には、確かに、二時間後もお清さんは生きているつもり

でいたはず」という「私」の直感を信じるなら、この空白の二時間のうちに、居留民社会から排除された境遇の中で耐えに耐えてきた彼女の精神をもつてしてもついにしのぎきれない、さらに苛酷で忌まわしい暴力的な事態が彼女を急襲、ために「お清さん」はその生を支えきれなくなったという事態が想像できないだろうか。

そして、そのような暴力性は時と場所を違えて、今度は自らの被爆体験を基にして林が書く小説に登場する人たちの側にあつても顕在化してくる。その一例が、同じ連作集に収録された「友よ」に描かれている、三十二年目の追悼式典に参加した「私」の友人の中田が、会場に展示された原爆投下直後の浦上を写した写真の中の一枚に目をとどめ、それを、「うちが燃えてる」というように現在形の出来事として受けとめていく場面である。第三者の目には原爆の威力や特徴が示された記録や証拠となつて映じる写真が、叔父が拾ってきた死を知り、それでもつて自らを納得させようとしていた中田にとつては、母や姉たちの肉体が焼き尽くされていくさまを、いま「はじめて」まざまざと見せるものとなつて迫ってくる。それがどんなに彼女の心を引き裂く暴力性に満ちたものであつたか、終戦直後は死んだ家族への断切れない愛しさに支えられて、涙

をこぼしながらも声を立てなかった中田の、いまここでは「肩をしほめ」て「嗚咽」とも「悲鳴」とも言える声をもらしていき姿が、そのことをはつきりと伝えてくる。

小説は泣いている中田の横で何一つ彼女に向かって言うべき言葉を「私」が持ち得ないところで終わるが、偶然的符合だろうが、中田と同じく「八月九日」に「一滴の涙も流していな」かった「私」の目に「涙があふれ」だす場面を捉えた作品がある。広島、長崎への原爆投下の一月前、人類史上初の原爆実験が行われたアメリカ合衆国のニューメキシコ州ロス・アラモス郊外にあるトリニティ・サイトに、林自身が一九九九年の秋の一日に訪問した折の体験を綴つた「トリニティからトリニティへ」と題する小説がそれだ。「ゲランド・ゼロ」の記念碑の前に立つ「私」の眼に涙があふれたのは、四囲の荒野から寄せてくる「無言の波」の中に、五十余年前の七月にこの地を走つた閃光に焼かれた「大地」の痛みを感じとつたからだ。この「大地」や「荒野のものたち」の「攻撃の姿勢をとる間もなく沈黙を強いられ」ていく姿が、自分を襲つたものの正体がかかめないままに逃げ惑い、草むらにしゃがみこんで白い泡を吐いていたあの日の自分を現前化させていることに注目したい。自身の痛みを何かに相対させようとする感情を培ってきた、その後の半世紀に及ぶ時の経過の中

での体験に比べれば、そうした思慮を働かすにはあまりにも無垢で無防備だった自身の生の根がひどく傷つけられる際の痛みを、「私」はいま、新たに味わう。

しかし、それにしてはなぜ、こうした痛苦の前に立たされることのみを自らの生の証として、「私」は生きていかねばならないのか。このような絶望感を、もし違つたかたちのものでしていく可能性があるとすれば、それもまた、物言わぬ大地とともに痛みを感じていることを告げる「私」の言葉の中にあると思ふ。なぜなら、「私」のその言葉は、自分たち人間よりも被爆者の「先輩」である「大地」に対する謙虚な魂の働きによつて発せられているから。言葉にすればただ一語の、しかしそれに到達するには長い時間をかけた人間の体験が必要とされる謙虚な魂の存在が、人類の将来を滅亡から救う里程標となることを林京子の小説は伝えている。

編集後記

新年も「平和」から遠い現状が続中ですが、その解消に向けて尽力する方々も存在します。今回はその一端を垣間見て頂きます。今年もRCCは様々な発信を継続していく所存ですので、どうぞその働きをお覚え下さい。

RCC主任研究員・経済学部准教授

舟木 讓